

新潟の東蒲原郡では、秋は稲刈りが忙しいので、朝早くお墓参りをする。春は残雪が多くてお墓参りができない、お彼岸には、先祖・父母に対して「百年孝養を致すとも恩は報い難し」(雑宝蔵経)とお釈迦さまが言われているから、春秋のお中日にはお寺で彼岸会、お斎(精進料理)を出す。住職は、檀家にお参りに行くならわしである。

お彼岸になると思いつくことがある。二十年程前、山奥のお寺に手伝いに行った帰り、末寺の庵主様Sさんを送っていった時のことである。本堂に沢山の「おはぎ」が置いてあり、何時も世話になっているからと、大きなおはぎ、六個入りの包みを二つ戴いた。

すると、Sさんは、「おはぎ」の「つぶあん」？「ぼたもち」の「こしあん」？謂れを聞いてきた。わたしは、江戸時代の『和漢三才図会』に、春は牡丹の花に因んで大きく作る、「こしあん」の「ぼたもち」、秋は、萩の花に因んで小さく細長く作る、「つぶあん」の「おはぎ」、秋の収穫に感謝して、小豆をそのまま食べるから、「つぶあん」。春には、小豆の皮が堅くなるから、「こしあん」にする。(「ぼたもち」・「おはぎ」については、由来・地域・習慣により色々あるようです)

Sさんは、先日のお彼岸のお説教が良かった、聞いたよ。自分も勉強するから、話を聞かせてほしいというのである。お彼岸のお中日は昼と夜の時間が同じである。東から昇り真西に沈む。太陽に対して願う日、だから、「日」に「願う」ひがんで、日願から彼岸になった説がある。そして、太陽の崇拜と阿弥陀さまが居られる浄土信仰と結び付き、七日間のうち、お中日はお寺参りお墓参りをする。他の六日間は仏教の中道の生き方「偏らない正しい生き方」つまり、「此岸(苦しみ)から彼岸(やすらぎ)に行く六つの菩薩の修行・六波羅蜜の教え」に当てはめた。先祖のみ霊を慰め、ぼたもちやおはぎを捧げ、先祖供養の徳を積んで六個「おはぎ、ぼたもち」のお供えをしたのである。

六波羅蜜の行いについて、心やすらかに、みほとけ御仏の前に坐り、御先祖に思いをよせて実践して参りましょう。

①布施の行とは、水やお茶をさし上げる。水は掴むものではなく、水は掬うものです。心も掴むものではなく、心は受け取るものです。自分の出来ることを心でもものでも施す生き方をする。すく

②持戒の行とは、正しいことを持続していくこと、形に現して、産んでくれて、育ててくれて有難う、感謝の気持ちで、仏壇、墓石を掃除する、「心のチリ」も一緒に掃除する。身心共に清々しくなる。それと、香炉の中の灰も掃除をする。にんにく

③忍辱の行とは、苦しみ、恨みに心をみださないこと。一本の草花でも供えると安らぎが生まれる。お花は仏様の徳をあらわします。色んな花を組み合わせて調和している。家族、社会でいろいろな個性があり、皆なバラバラで皆な一緒に排斥しない平等な世界をあらわしている。花の水を小まめに取り替える。安らぎを持って生きる。最後まで命を大切にする。

④精進の行とは、たゆまない努力する、だから、お線香は真つ直ぐに立て、仏様と線香、自分が一直線になるようにすると、心が一つになる。線香は頭火をつけると最後まで燃える、自分の仕事を最後までやり通す姿を現す。一生懸命に生きるハート。せんじょう

⑤禅定の行とは、心をしずかに保つこと。空腹になると怒りやすくなる、だから、食(靈膳)は、おいしいものをさし上げ、おさがりを相伴することは、祖先とつながることになる。食事することは心の安らぎを得ることにつながる。ちえ

⑥智慧の行とは、知識が有っても行動がなければ、無意味になる。お明かし、蠟燭等を点けた時に、仏様と変わらない明るい心で生きる「心のスイッチ」を入れる、お釈迦さまと、ともに願いを持って生きていく。

Sさんは微笑みながら、「わたしは何もできないから、ただ一生懸命行っただけだ。後を頼むね」といって「おはぎ」と抹茶を出してくれた。今年でSさんが亡くなって十七回忌になった。